

## コラム 09 — 日清戦争において中国の教科書で、事実と違っている点

1894(明治 27)年 7 月 25 日 豊島沖海戦(写真)が生起するが、日清戦争について、中国の教科書では戦争の直接のきっかけとなったのが、この豊島沖海戦であり、この海戦について、中国は日本が一方的に中国の輸送船に攻撃を仕掛け、多くの兵士が犠牲になったため、清国は日本に宣戦を布告したと述べています。



豊島沖海戦

しかし、これは清国軍艦「済遠」が朝鮮半島南部西岸を偵察中の日本艦船に砲撃

したことから始まり、東郷平八郎大佐を艦長とする「浪速(なにわ)」がこれを追撃中、清国軍や兵器、弾薬を搭載していた英国船籍の輸送船「高陞(こうしょう)号」に遭遇し、随行を命じたが従わなかったため、国際法に基づき、警告信号の後、輸送船を撃沈したものであります。これについては、当時、英国政府も東郷大佐の取った処置は正当であると評価しています

また、1894(明治 27)年 11 月 21 日、旅順口事件が生起します。日本軍が旅順を攻略した際、多数の支那市民を虐殺したとの誇大報道が流れ、今日でも中国では「旅順口虐殺事件」で 2 万人の市民が虐殺されたと述べています。

日本軍の法律顧問として従軍し、陥落時の旅順市街に自ら入った国際法学者有賀長雄博士は、この事件について次のように述べています。

「我軍が旅順市内に侵入した際、戦闘者と非戦闘者を区別せず襲撃したのは、大山第 2 軍司令官も承認する事実ではあるが、これには十分な理由がある。」として、次の 3 項目を挙げています。

- 1 旅順は通商のために自然に発達した市邑(しゅう)ではなく、軍事目的で建設された港町であり、住民といえども従軍の非戦闘者であって、交戦時には襲撃の対象になることも止むを得ない場合がある。
- 2 敵の敗残兵は民家の中から銃撃してきたため、我軍が非戦闘者の居る家屋に向かって襲撃したのは、十分な理由がある。
- 3 敗残兵は民家に遁入して便衣に着換えた者も多く、従って兵士と非戦闘者を弁別することが困難であった。

このように博士は、我軍が兵士と非戦闘者を区別なく攻撃したことには、十分な道理があるとし、さらに強姦を行ったとか、婦女幼児まで殺害したかの非難に対しては「事実にあらざること」として取り上げていません。抵抗せずに投降したものは虐待されることもなく、現に旅順陥落時に捕虜になった 355 人の清国人は、日本側の

厚遇を受け、東京に護送されています。

さらに旅順攻略後、同地行政庁の行政官となった鄭永昌の報告書によれば、「日本軍の旅順上陸を聞くや、・・・市民はみな財産家族をとりまとめて、陸続き芝罘（チーフー）に遁れ、又は近村に移転するもの数を知らず」とあり、そして「支那兵が旅順に駐屯するや、ほしいままに民家に乱入し、家具を破壊し、財産を掠奪せしもの少なからず、故に日本軍の進撃せし時は、旅順市街すでに空虚なり・・・」と当時の状況を述べています。

これらのことから、市街に残留して我が軍に抵抗した一部の非戦闘者に犠牲者が出たことは事実であっても、2万人の市民を「虐殺」したということはありません。